

## 世界展開力事業 ブラジル長期留学 4年 川村怜

2018年8月から翌年6月までブラジルのサンパウロ大学に留学しました。”太陽の国”と言われるほどに情熱的な国、ブラジル。地理的にも日本の真反対に位置し、そのギャップは実際に踏み入ったことのない皆さんでもなんとなく想像出来るかと思います。

本当にその通りでした。想像を越える出来事に溢れた一年間でした。果たして向こうでどんな経験をしてきたのでしょうか。簡単に思い返してみます。

私のブラジル留学は、ブラジル人11人とのルームシェアから始まりました。日本でも一人暮らしの経験が無かったので、それが異国となり苦悩は5倍に感じられました。

中でも料理は骨が折れるようでした。初めは近くのスーパーも分からず、探すのも、危険な国と思い込んでいたため外出がとても恐れ多かったです。いざ近所のスーパーを知っても、食材は見慣れないものが多く、文字も読めず、調理法の分からないものばかり。米ひとつとっても日本米なんかある訳はなく、そこにあるのは細長い何か。炊き方や調理の仕方すら知りませんでした。

また、日本のスーパーの違いのひとつに人との交流が多いという特徴もあります。例えば肉を買いたい場合でも、何の何処の部位を何グラム欲しいのかを伝えないと手に入りません。更にレジでも何かしら宇宙語で話しかけられ、質問されます。「おはよう、どこの国から来たの、ああ日本ね、素晴らしい国だわ、友達が昔日本に旅行したわ、ところで何を勉強しているの、ブラジルのどこが好きなの、、、」というように。

料理をしてこなかった私は、初心者用の料理本を日本から持って来ていました。しかし参考になったのはゆで卵や半熟卵の作り方、野菜の切り方のページのみ。残りはただ食欲を誘い、何とも形容しがたい行き場のない懐かしさを生むだけの、目に毒なものとなってしまいました。と言うのも、醤油、ごま油、出汁、酒などのちょっとした食材すら当初は手に入らなかったのです。

と言う訳で、当時の私には料理というこれら一連の行為がとてもハードルの高いものでした。よって初めは日本からのお土産をゆっくり消費し、飢餓をしのぐ日々を過ごしました。

つい印象的であった料理についてつらつら綴ってしまいましたが、最初の壁はそれだけではありませんでした。住み始めて一週間が過ぎた頃でしょうか、家では英語禁止令なんかも出されました。ポルトガル語が全く話せないまま留学した私はそれまで英語でコミュニケーションを取っていたので、このままでは語学が向上しないだろうからとの事でした。

嬉しい、楽しい、悲しい、簡単なリアクションさえも伝えられません。英語を話す人間はいなくなったので周りの話もひとつとして理解出来ません。誰かが何かを言い、そこにいる全員が朗らか笑っても自分だけは冷たい輪の外。

言いたい事も言えない、周りのことも分からない。皆さんはそんな日々を過ごしたことが

ありますか？私は強い孤独に見舞われ、たったの2、3日で死んだような気持ちになりました。

これまでも人生、これほど人と話すことの重要さを感じたことは無かったと思います。コミュニケーションの有無は生死に関わります。と断言してしまえるような、なかなか経験し難い貴重な体験をさせてもらいました。

他にもルームシェアで当たった壁は、朝食に米を食べてドン引きされたり、物が無くなったり、自分だけ不当に家賃が高いことが判明したり、挙げ始めたらきりがありません。しかし壁と言ってもそれは同時に異文化理解を深めさせ、問題解決へ導く力を補う素晴らしい機会となったことにも違いありません。

一先ずは経験を簡単に思い返すという事で、あとは羅列させていただきます。

120分のポルトガル語での経済の授業及びテスト、ヤクルト牧場の視察、初めてのインディアンと交流、他大学の授業聴講、栗農家の訪問、インディアン集落の訪問、前年にお世話になった他州の農家訪問、アマゾンでの1ヶ月以上の実習、酷く醜い虫刺され、JICAの案内による首都の訪問、留学先大学キャンパスの変更、引っ越し及び家探し、ペルー人とのルームシェア、急遽決まった彼女との旅行、リオデジャネイロで観たカーニバル、初めての病院、日本人開拓部落の訪問、たった一週間の一時帰国、農大OBの農場訪問、数多くの駐在員さんとの出会い、ルームメイトとヒッチハイクの旅、飛行機を使った一人旅、味の素の工場見学、フリーマーケット、、、などなど実に星の数ほどございます。

全ての事項の詳細をお伝えしたいところですが、果てしないので割愛させていただきます。事によっては留学中の報告書に詳細を記述しているので、ご覧になって頂けたら幸いです。

それでは次に、帰国報告書という事で総括して私はこの留学で何を感じ、得たのかお伝えします。大きく分けて3点あります。

ひとつ目は、多くの人と交流の中で自分という人間を自覚し、自ら飛び込み挑戦することを学んだ事です。

日本では、私という人間を大まかに知る友人や家族に囲まれ、こちらが意思表示せずとも分かり合える環境が常にありました。

しかし、留学中は違います。私という人間はおろか、日本人という人間さえどういふものなのか知らない人々の中に身を置きます。また、日本にある言わずと分かる雰囲気というものもまるでありません。さらに、地球の裏側からの留学生ということで、大変珍しいのか、ブラジルに何の為に何をしたくて来たのか、将来は何をしたいのか、という少々重たいような質問も、まるで名前を聞くように、呼吸をするように軽く投げ掛けられるのでした。

よって、新しい出会いの連続であった留学中は、自分という人間がどういふものなのか理解し、簡潔に示さなくてはなりませんでした。

まだ慣れていなかった頃は私も十分に伝えることが出来ず、なかなか打ち解け合えなかつ

たように思われます。

今思うと当然のことです。

自分という人間がどのようなものか示せない、又は自分自身でも分からない人間が相手の興味を引くことなんて、あり得ない話でした。

また、人には常に意思表示を求めます。意思表示のない人間は、いない同然と言っても良いでしょう。

一方で、意思表示する者がいたなら、彼らは全力でそれを応援するのです。これは、出る杭打たれる、全体を意識する日本とは大きく異なる文化です。

私もまた、それに倣い積極的に行動していきました。留学先の大学のキャンパスを変えた事が分かりやすい例でしょうか。

前例がなく、極めて異例な事でしたが、農大と前キャンパス及び次のキャンパスの国際協力センターの方々に頼み込み、お陰さまで現実となりました。

上記は一例ですが、行動してみると思いの外願うようになることが多かったです。

またもしそうならなくても、何もせずに日々を悶々としているよりは諦めがつますし、何よりその目標に向かって進んでいる時は、活力に溢れとても楽しかったです。

2点目は、多様な生活及び彼らの世界を知り、生き方はごまんとある事、何でも方法はあ  
る事、したいように出来る事を知ったことです。

これにより、以前より世間や他人の評価を気にしなくなり、またより楽観的な人間になった  
と思っています。

日本では、一般的、いや理想的と言えるライフスタイルが存在します。どこに書かれてい  
つ教えられたのか分かりませんが、一般に私たちが思い描く人生像は、一見多様ですが実は  
見えない型の中に収まっているように感じます。小学校、中学校、高校、大学、又は大学院  
を卒業し、就職し、結婚し、子供を産み、定年で仕事を辞め、貯金で老後を過ごす、、、とい  
うような。

ブラジルでは違いました。実に人それぞれの人生を歩んでいるのです。

大学の友達ひとつとって、年齢はバラバラ。ある人は働きながら通っていますし、ま  
たある人は仕事を辞め通っています。子供を連れて学内を歩いている人もしばしば見受け  
られました。

大学の外なんかを見ればもうそれは本当に七色です。

ハネムーンでブラジルに来てそのまま住み着いた方、日本人だが大学卒業後好きでブラジ  
ルに就職した方、30歳を過ぎてもこれという職は無く趣味に没頭している方、祖国を捨て  
移住している方、などなど、、、。

移民の国であらゆる人種や生活、文化を受け入れる国だからか、どの方々も周りに押し潰  
されることなくのびのびと生きていました。型というものがほとんど存在しないのだから  
当然の結果かも知れません。

日本では、あの枠の外は恐ろしい世界が広がっているようにも感じられます。向かい風が強く社会から見捨てられるような、はたまた幸せがとてつなく掴みにくいものになってしまうかのような。

果たして実際はどのようなのでしょうか。私はブラジルで実際に多くの方々と交流し、時には共に生活をして、全くそうではないということを体感しました。これをこの身をもって知ったことは、強さです。

私もまた無言のしがらみに悩むことなく、めいっぱい思い切り私の人生を楽しもうと思えます。

また、もし壁にぶち当たったとしても心の中で彼らを思えばしゃんとしていける気がします。(もっとも留学中にあらゆる困難を乗り越えたせいか、ちょっとやそつとの事では動じなくなった気がします。)

そして最後は人の為に生きること、助け合って生きる幸せことを知ったことです。これは、私の中で最も大きな変化でした。

恥ずかしながら、私はどこか一匹狼的なところがありました。自分ではそんなつもりはありませんでしたが、かつて冷たい女だと言われたこともあります。

日本ではしようと思えば人に頼らず一人で生きていくことが出来るかも知れませんが、ブラジルではそうはいきません。

私もスマートフォンの契約、病院、家探しなど、留学中はいつも多くの人に助けられてきました。それは、私が言葉の不自由な留学生だからという理由だけではありません。

治安の悪いブラジルでは、例えば現地人でも夜道を歩く時は必ず誰かと一緒に行きます。一人にならないように当たり前のように家まで送ります。そのように、周りが危険だからこそ仲間同士は互いに助け合う慣習のようなものがあるように感じられました。

そうして、私も多くの人に支えられる中でその大切さを知り、してもらうばかりではなく、自身も人の為になりたいと強く思うようになりました。

翌春からは、社会人になる予定です。これを実際になる前に気付くことが出来て幸運だったと思っています。

さらに、その後ルームシェアしていた彼女の”私のものなど存在しない”という概念を知ったことも相まって、私はもうほとんど留学に行く前とは違う世界観の中で生きているような心地さえします。

彼女の考えは過度に聞こえるかも知れませんが、あるいはそんな言葉で世界観が変わるのかと感じられるかも知れませんが。

しかし実際にその考えに則って生きることは、全くそれを持ち得なかった私には簡単なことではありませんでした。

食料品、衣料品、更には時間まで私とあなたの境目が無いような生活です。

初めは戸惑うことも多かったですが、自分が意識して実行してみると感謝されることも増

え、温かな気持ちになりました。

また、長い時間彼女と共にすることで、彼女の”私のものなど存在しない”という考えが、実は私も目指す”人の為に生きる”ということと元来は同じだと気付きました。

ものをはじめ、時間、更にはこの体さえそうなのかも知れない。私のものであるはずのこの爪は、確かに私の意思と反して伸びてゆくのです。

なんだか話はやや壮大になってしまったかも知れませんが、取り分け悟った訳ではありません。私という人間はそのままです。

ただこの裏側で約一年生活してきただけです。

